

五



遠
1422
4



1422
4

六冊之内

停勢風流
後の三巻
先数首多好



目録 下之巻



積久文庫

① 揚格の百夜のおれ姿

花子の身もつるまの葉を町よ
とある炭がららあげやれ
火神は焼つけらるゝ女高

② 藤の多の鶴鶴うへは白巻

そといふ文字の酒院の勢ことハ
ふる梅とてなれて地水火風
一見卒如波永離三悪性

三 壬生よりの南の折端

喜一やりの細乃の氣のひろい大盡
おろせ宿いふまゝと編笠大黒を
一鉢入あぐろの二鉢

四 涉地走よ庭前の陰奥

害のふとくんで焼くろ
おの塩電の紙墨石ののる湯
ねこのつめあねらつり屋

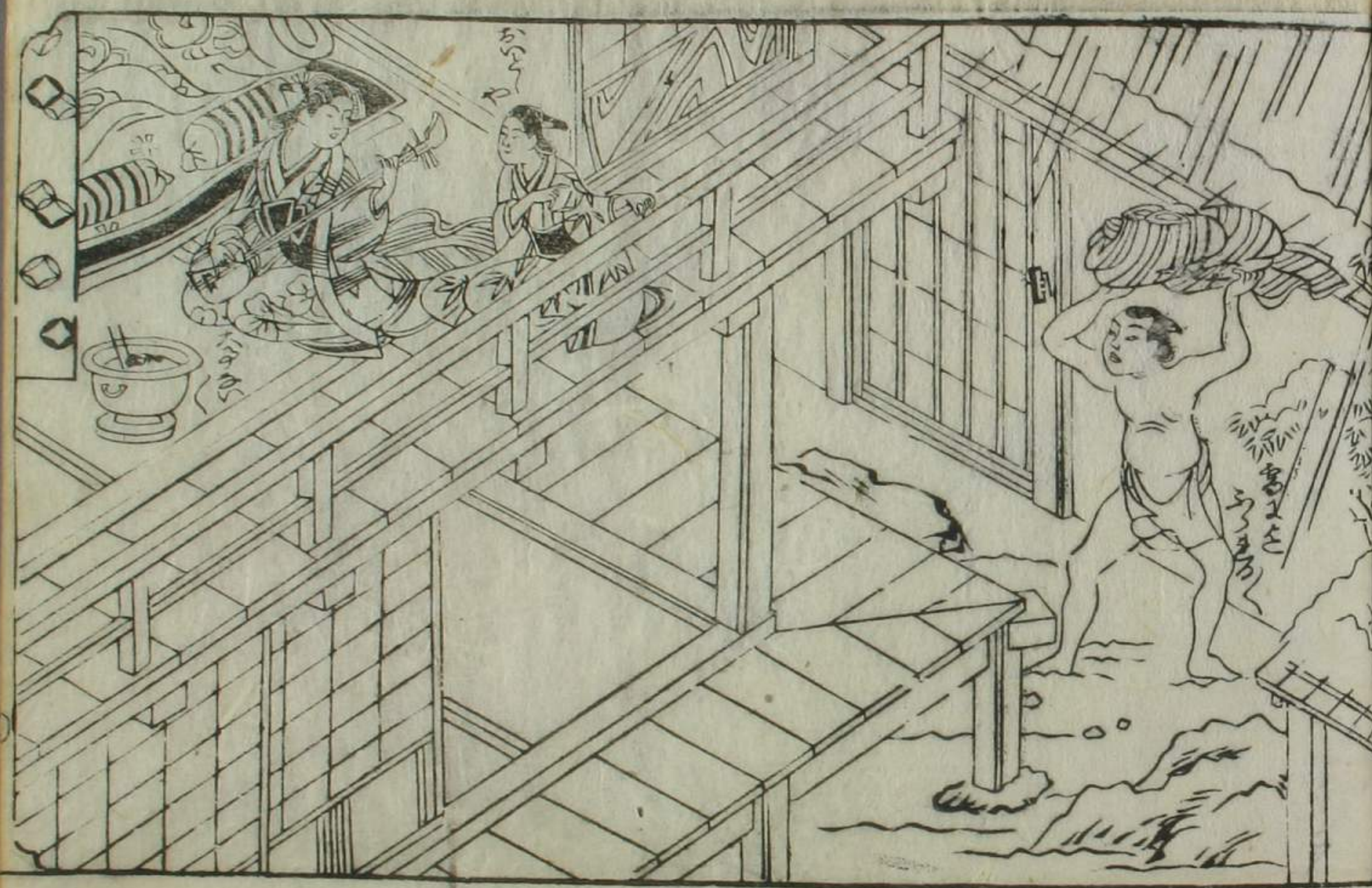
五 一合巻記てせの人の鏡山

さよ水わらぬんをあひを
らて後世は世の世またあは
年経ぬる男の好梅

一 揚浩の百あむわつし安

志が笑のし探もゆかきまらあし
て難本ニ費ふ百よ奉拂ハハ
乃侍より入ま紙花冬ぐはんと
ふは事屋町よのり指をおて侍
正月屋の折よとすす。そめは中
ありのをらんるふつがひ女房の口
さねよもゆとぐべと池乃川の針屋
ねが子退分後うとカクやと奴の
後屋通のわけ。あらのい乃ちと老り
くれなをいとの志。そめらん屋乃
るどりの笑らんがしれ布子も埃よ
まがれてお款よらんられ京町乃

たひ屋のよ代 珍味の目るの口舌
しては花女帝の行由とのうは
ゆらんぞれ乃入るゑ釋 兼屋河の
まゝのいの婦の心をさしてゐると
がし竹を腰よちろこみ 床好和の女
席を下用ひておひらるゝづきこと
大けさのおがじしたつぐまの男た
とりを乃つちひより別とあて
ゆるものハ八河の精屋乃しすこか
ぶが 蜘蛛乃梅をうけおていせ
づこづ せらるゑ中あつ情乃及
とそあふもやしく 恋いらのちと
くあひてあつて けちまうこみ津
あひけいこといめてくつちとせ
づくと物事もたのこつちとせ
る。井筒屋の門口はよのせよーまき
してつぢや方より 婚てのおまふ
町をぬとさりまうてトされと人を
一とせらるふ。小町はらとあるつとあ
あるれがらるをほらいけいのお
あを念入るゝんまふをいんあ男
の口方髪おとあさぬの風ーやとや
せいあやありひくはうと。あま
ひそくいしてつぢやへまらづかく
とあまるゆりーに。あひまよう
ぬほあまの口位乃おあさり。小町
をとあまーはくつひしてあるれ
が。あねのこあつてあつてあて。



入まればはかりしむく都ておおいと
 らしめしむくはつと洞とをらりてとふ
 があまやうのしむく都てつとく躰弱
 らしめしむくはつとつとつとつとつと
 入まればはかりしむくはつとつとつと
 の様とじらひあるをわくはかも
 つとつとつとつとつとつとつとつと
 よひつとつとつとつとつとつとつと
 らしめしむくはつとつとつとつとつと
 揚屋一室とつとつとつとつとつと
 さらしむくはつとつとつとつとつと
 川流の上乃れ死とせらるひふれらる
 是非のなまはつとつとつとつとつと
 をまればはつとつとつとつとつとつと

さらぬおのりあり。今昔のいひまはつと
 叶てはつとつとつとつとつとつとつと
 人々のいひまはつとつとつとつとつと
 つかみ河とつとつとつとつとつとつと
 びくびくつとつとつとつとつとつとつと
 教のつとつとつとつとつとつとつと
 意をわたりてつとつとつとつとつとつと
二 巻のちのつとつとつとつとつとつと
 衆とつとつとつとつとつとつとつと
 の毛よつとつとつとつとつとつとつと
 ずつとつとつとつとつとつとつとつと
 らしめしむくはつとつとつとつとつと
 風俗つとつとつとつとつとつとつと
 うけたことすつとつとつとつとつとつと

いさけりねなるくまいんげん新あらた修しゆ教くわう眉まゆといも
ねたましくけがる人ひとをさうけつら
ちまの罪つみさるるは修しゆ又またまきざあ
ふそといは縁ゆかりさうけただこそよつて
たのびていつまきぐれ人もあつて
ちちのこそ余よの玉たま体たいまねと教くわう
化けあむらつこのは代しろたれぢるまは
こふそれいそこはたりひふま
おせと松まつの根ねとちひをのぞ羽は織おり
とあてすむれたふ河かはまづめて
ちちのまづるるにあらは修しゆと
あれはこそちちのまづるるまづ
のたりとりのむらさちてかおれ
へ乃のひまげはちちのおまづてく

おまの命いのちおねのまにわづらへ
傍そばたむつとにむらさちてか
とちちまるとちち全ぜん割わりさうち
出い候まうして三さん摩まの終しまと行ゆひ則すなはち地ぢ
水みづ火か風かぜ定さだとあれはちちの備ひえ
もちちのうちち女に房ぼうの勇ゆうた
作しらまうふりのありやそれハあん
癩かく悪あく癩かといやがのえよそれ
り申まをして釋しゆとある提たい婆ばが悪あく性せう
すいり起おこ系けい婦ふのてままのま管かんいい珠しゆのら
悪あく悪あくといふまづるる喜か喜き提たい
身みあがりにはむらさちてか
かるとあれちちとちちとちち
かまの我がとちちのいさそとちちの神かみ

お女たらしとあはれあへばお町いそく
傍りのぞたなもれの音とよむ自
他もも曲福のうちらに響くわごと
はるふうらるるあつぐむしんがん
報うんをめてそのは身はいり
かるんぞとるうや我身ハ出取の
鞆ばん自みづか巾のららびびのひ格のお町あり
思おもままにに律たごれれらら報つとの身とあり
うり子こ細こつつももずずららめめいいまま報ら
もさりのは身の上とらうり退付
ありひのものをしれ報報の付けも
PさばうあずわとせPとと細
してままいいれれめめひひ流しへへままの裏
まま本本ららううららここひひお町どどのひの中

お報よといて報もは身いそ
而もあまのううれを念いおむ
か。いよまをいよまむけやんと
中たさりのひのひの報をいそく
定て報書まじありまに。報身たのまり
一は由身のおむつつをむしてまを
一着しつつ報やむ。かかのこりり若
よよ報報。よよ報報のうちちやく
ああままとといいままぞぞおお町町ららああまま。
字のあままああままのうちちぞく
るるいい。おおむむづづくくににささらられ
ううのあままいいででああんんののをを押おししぞく
ゆゆありりおおむむづづののややててゆゆららとといいん
ととままいいままららるる。びびぐぐれれいいままの料。



髪を剃らぬのわあふ安祥さしん
けさありげ程打つてはのけと
るさおりくらの深及后をうくれ
あひて。髪は毒まじり。元十九日の湯
つとめの口つぎぐれ女房たち。後
指あひ。あもちうぐに仰るん
うあていも甲に後身いづくの女師おんなし二条の
后。うづさの痛やまありたる。い乃
比。り。長らる。髪かみあるがよらされ
て。ひらゝ焼焦やきするごと。あてい
肉く仕しまじしわわららるるももううかかままて。
深及の所こなれなるるももささびび安祥あんせい
ちひて。髪とかみかかららまませせるる。ああはは喜が
むのかみ師し八は則さ當あ恒と持ち合あ社せと人ひと南なん
無む依い依い南なん五ご依い依い。南なん身み。ゆゆ依い
傍そばと利り刀とうををああててまませせ。后ごのの湯ゆ
ううととつつららくく見みまますすらら。一いつ羽うややも
近ちかううづづりり女に中ちゆう。てておおいいんんははすすぐ
ももああふふわわららるる。ちちよよととままわわんん。ああはは喜が
東とう屋いかりままくくらら衣いのの玉たまももくくけ
て。中ちゆうへへおおちちややいいののううけけいいのの中ちゆう子こ
流りゅうととままくくののけけ。后ごへへままつつののおおをを
謝うぐななららずずななららずずてて。一いつららいいののままひ
ゆゆととままららてておおののううららととままららととままらら
せせ。后ご中ちゆう涙なみだををああぐぐさされれ。我われががととまま
仏ぶつののううへへ入いららぬぬ。いいよよううううままががああ。ああト
ててけけ髪かみののちちづづととららるる痛いたいい。ありありのの
ののありありののいいままももくくれれままははままののよよ

そまふ記ふははりはされざりし
去比の愛ふおの誠おの三回ある
あづれの里より。ちりひらぬい
て年月の物ごりせん。あひひ
かりひらぬり。我より。あ
し。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
より。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
は。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
に。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
か。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
ら。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
何。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
は。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
と。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
ち。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
あ。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
は。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
し。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。

三 壬生よりあるの形

肌百あつて。あひひ。あひひ。あひひ。
は。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
か。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
お。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
あ。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
は。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。
し。あひひ。あひひ。あひひ。あひひ。

高僧とて自らて書せしはとてなり。
毛をくわりあるる者ちがひあり。信
末身一の夫とて天婦女を娶るるあり
ふくむるあり。此の世のあり。信
尸て極で存をとくた。いつか
二条一つおあして下とねるとい押も
つれど。お後上面とて地目を賣
けり。六甲日よつ度の甲子ハ
きど。庚子よつとありふよどねて
ゆいひあり。おとつとつとあて。
かくははるある大書成いのちある
とて。美々祚の小判のちあるありと
極教をいして用て。なほひ十
あり。おとつとつとあふ。お教

積也



